

夏樹静子

新潮社版

女検事 霞夕子

螺旋階段をおりる男



夏樹静子

階段をおりる男

新潮社版

おんなけん じ かずみゆう こ ら せん かい だん おとこ
女検事 霞夕子 螺旋階段をおりる男

著者／夏樹静子

*

発行／昭和60年4月25日

2刷／昭和60年7月30日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部 03 (266) 5111・編集部 03 (266) 5411

*

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／加藤製本株式会社

*

定価／900円

©Shizuko Natsuki, Printed in Japan. 1985

ISBN4-10-346202-7 C0093

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



目次

予期せぬ殺人

5

螺旋階段をおりる男

65

白い影

133

装画
山口勝弘

女検事 霞夕子

螺旋階段をおりる男

予期せぬ殺人

へこちらへ来て、早くも十日が過ぎました。今日あたり、東京は桜が満開ではないでしょうか。金沢ではまだ蕾がほころびかける頃です。一昨日の日曜は、はじめて町をぶらついてみました。ひっそりした寺町の坂を歩いていたら、華江さんの家の付近を思い出して、無性に東京が懐しくなりました。……

元麻布の坂の途中で車を停めた宮内華江は、さっき出がけに郵便受けから取り出した石川保の手紙に、もう一度目を通した。そういえばこの辺にもいくつかお寺があったなどと、今さらのようにながらうに気が付いたりしながら。

犀川大橋の上に立つと、古い家々のたたずまいが望まれて、こんな静かな町で華江さんと二人で暮せたらなんて、ぼんやり夢想していました。でも、学生時代とちがって、仕事はずいぶん忙しそうで、今度はいつ東京へ行けるか――

華江は口許に微笑を残したまま、便箋を封筒に戻した。淡いブルーの和紙に兼六園の庭園を白抜きにした封筒は、文面の少々女性的な稚さともマッチしているみたいだ。華江はちよつと眺めてから、封筒ごと二つに破り裂いた。この先まだ二、三回はこんな便りが届くかもしれないが、やがて彼は新しい職場に馴染み、年齢相応の女友だちでもできれば、華江との思い出は自然とうす

れていくだろう。去るもの日々に疎^{うす}しともいうから……。

華江は七分の安堵と、残り三分はほのかな感傷に浸りながら、破った手紙を一捻^{ひとひね}りして、ひとまずダッシュボードの下に屑籠へ放りこんだ。

車を降りてロックすると、軽やかな足取りで道路を横切り始める。大柄でプロポーションのいい華江は、グレーの地にオレンジ色の罍^{けし}粟^しが描かれた、洒落^{しやれ}たワンピースを着ている。ここは元麻布から六本木へ下る傾斜地の途中の道路で、両側には古風な洋館や、四、五階建くらいの高級マンションなどが建ち並んでいる。四月十四日木曜日の午後三時すぎ、薄曇りの空の下で路上駐車の車が点々と目につくほか、人通りは途絶えていた。

華江は、〈ジュエリー・光本〉と表示のある小さな店のガラス扉へ歩み寄った。先日買ったファッショニングのサイズ直しができていた頃だった。

ジュエリーのスウィングドアは、いつもながらひっそりと閉まり、街路樹の影を映している。華江の靴先が、そのドアまであと二メートル足らずに近づいた時——突然意想外の出来事が発生した。ドアが凄^{すご}い勢いで開いたかと思つた途端、店内から背の高い男がとび出してきて彼女と衝突した。彼女は突きとばされた恰好^{かっこう}で尻餅をついた。プラタナスの根元に手をつき、落ちていたガラスの破片で小指の横を切ったが、その時にはまるで気付かなかった。それよりも、激しい驚きと怒りとの両方で、倒れながらも目をむいて相手を見返していた。

相手にとつても、それは思つてもみないことだったらしい。一瞬息をのんで華江を凝視^{みつ}め、二人の視線が宙で絡^{かち}んだ。茶色っぽいチリチリ髪にジーンズのジャンパー、まだ二十歳前後くらいか……と彼女が感じた直後、男は再び走り出した。その拍子に、ズボンのポケットから何か光るものがこぼれ落ちて、華江の脇^{わき}のそばに転がった。指輪らしい。

彼女は反射的に立ち上った。夢中で男の後を追って走り始めた。

「泥棒……誰か来て……泥棒……」

相手の足は疾い。一メートル七十五センチ以上はある、屈強な体格の若者である。早く誰か来てくれなければ、みすみす逃げられてしまう……と思う間に、男は道路脇に駐めてあったバイクにまたがった。エンジンをふかし、スタートする直前、彼は華江を振り向いた。頬のこけた酷薄そうな顔が、恐ろしい形相で追跡者を睨めつけた。かつて味わったことのない恐怖と共に、その顔が彼女の眼底に焼きついた。

モーターバイクは東麻布の方向へ、見る間に遠ざかっていく。ナンバーを憶えてやろうと、華江は目をこらしたが、それは無理だった。

彼女は荒い息をついて、踵を返した。店内の様子が気になり始めた。こちらはいかにも不審な男と出会い頭にぶつかったのに、誰も追いかけて来なかったというのはどうしたわけだろう。中では何か大変なことが――？

華江が店の前まで戻る間には、車が二台ほど走りすぎ、先のほうで通行人の姿も視野に入ってきたが、もう遅かった。

彼女はスウィングドアを押して中へ踏みこんだ。と同時に、ショウケースの前に倒れている男と、周囲の真赤な色が目に入った。男は焦茶の背広を着た小太りの体軀で、頭部には産毛程度の髪が生えている。華江も顔見知りのこの老主人らしいと、即座に察しられた。

「光本さん！」

華江は駆け寄って、老人の顔を覗きこんだ。彼はテラゾーの床に頬を押しつけて目をつぶっていたが、その床の上にもみるみる血が溢れ出している。急いで頭の反対側を見ると、右の顳顬の後ろに無残な裂傷が口をあけ、そこから鮮血が噴き出しているのだった。凶器とおぼしき銀の一輪差しとピンクのバラも、華江の足許に投げ出されていた。

「ああ、大変……しつかりして……」

華江はうろたえたように視線を泳がせたが、それはわずかの間で、すぐにまた気丈で理性的な性格を發揮し始めた。

狭い店の奥のドアが開いたままで、事務室のような部屋が見えた。そこへ駆けこんだ彼女は、流しの横のタオルやテールブルクロスなど、目につく限りの布をつかみとって、光本のそばへ戻った。老人の身体はまだ温くて、死んでいるような気はしない。とにかく出血を防がなければ。

布を傷口にあてがい、ネクタイを緩めてやった。もう一度事務室へとつて返してクツションを持ち出し、頭部を高くすると、多少は出血がおさまったように見えた。

それから彼女は、ショウケースの端にある電話機へ手をのばした。一一九番にダイヤルするのは初めての経験だった。

事件のあらましとこの場所を告げ、受話器を戻すと、思わずその上に顔を伏せて、深い息を吐いた。さっきこの店に近付いた時から今までの自分の行動を、夢中で素早く思い返した。咄嗟の場にしては、よくやれたような気がした。

彼女はまたなんともいえない満足の吐息を洩らし、自分の左手の小指からも血が流れていることには、まだ気が付かないほどだった。

2

ジュエリー・光本の老主人、光本善次郎は、救急車で広尾の病院へ運ばれ、頭の傷を六針縫う手当てを受けた。

頭部の傷は出血が激しいので、一見非常に重傷に見えることもあるが、光本の傷は幸い浅くて、骨にも異常はなく、生命に関わるほどのものではなかった。

救急車と前後して到着した元麻布署員が現場を^{しら}べ、間もなく出先から戻ってきた光本の息子夫婦の話とを総合した結果、ショウケースの中から十数点の宝石と、ケースの内側に置かれていた小型金庫から約八十万円の現金が奪われていることが判明した。犯人は手当りしだいに^{わづか}驚嘆みしていったらしく、その辺の床には指輪やブローチが散らばっていた。宝石と現金とを合わせて被害総額は九百万円相当であろうと、息子がのべた。

彼らの話によれば、ふだんは大抵夫婦のどちらかが店にいたのだが、宝石のセールスなどで二人共留守をする時だけ、七十六歳になる父親の善次郎に店番を頼んでいく。四月十四日の事件当日も、彼が一人で店にいたところ、賊が押し入り、ショウケースの上にあった銀の一輪差しで彼を殴って失神させ、金品を奪い去ったものと推測された。

強盗傷人事件として、元麻布署で捜査が開始された。

被害者の怪^け我は思いのほか軽かったし、捜査本部が設置されるほどの重大事件ではなかったが、マスコミではこれが予想外に大きく報道される結果となった。それには、いくつかの理由が偶然に重なっていた。

第一に、光本善次郎がごく最近、全国紙の都内版に載った話題の人物であったこと。この二月に、彼はたった一人の孫娘を交通事故で失ったばかりだった。小学五年生の彼女が通学の途中でトラックにはねられた地点は、以前から横断中の事故が多発して、歩道橋の設置が望まれていた。そこで彼は、老後の備えにしていた預金の全額を都の建設局に寄付して、歩道橋の設置を願いつた。それがこのほど着工の運びとなり、都内版で紹介されたのだ。強盗事件の新聞記事には、「あのお爺さんがまた被害に――」といった、多分に同情的ニュアンスがこもっていた。

第二の理由は、同じ日に偶々、老人が若者の暴力の犠牲になるというケースが相ついで発生していた。一つは、祖母が中学生の孫に殺された。いま一つは、身寄りのない老人が高校生の二人

組に、受取ったばかりの年金をひったくられた――。

翌日の朝刊では、三つの事件が社会面の上段にまとめて報じられた。テレビでも、弱い老人が青少年非行の被害者にされる現代社会の特徴を、ことさら指摘するようなコメントをのべた。

中でも元麻布の事件では、もう一人の被害者である主婦の勇敢で沈着な行動も、賞賛的になった。宮内華江は店の前で犯人にぶつかられ、転んで左手を怪我したのだから、被害者の一人なのである。

それにもひるまず、犯人を追跡した上、倒れている光本老人を発見したあとの処置もきわめて適切で、もし彼女の応急手当がなかったら、彼は出血多量で生命が危ぶまれたかもしれない……。

おまけに、華江は事件の唯一の目撃者でもあった。というのは、光本は病院で意識を取り戻したものの、ショックで事件当時の状況をほとんど憶えていなかった。逆行性健忘といって、襲われる以前の記憶まで失っているのです、犯人について尋ねても、まったく答えられなかった。

犯人を直接目撃し、証言できるのは、華江一人ということになる。

彼女は、現場で元麻布署員におよその事情を話したあと、光本と同じ病院へ運ばれて、傷の手当てを受けた。ガラスの破片で皮膚を切った程度なので、全治五日といわれた。捜査員は病院までついてきて、治療の前後にも事情聴取を続行していた。犯人の齢恰好、人相特徴など、華江は自信のある口吻でしっかりと答えた。バイクのナンバーを見極められなかったのだけが残念だったが……。

夕方七時すぎにやっと南麻布の自宅へ帰ってきた彼女は、テレビニュースの終りのほうでさっそく事件が報道され、自分の名前が出てきたのには吃驚した。翌日の朝刊の記事は、またまた彼女に快い驚きと、自己満足と誇らしさとのうきうきするような興奮をもたらしてくれた。

彼女の家の電話がやたらに鳴り始めたのは、その日の昼まえからである——。

宮内華江は今年四十七歳になるが、造作の大きい派手やかな顔立ちと長身でプロポーションのいいスタイルを見れば、誰でも四十二、三くらいにしか思わないだろう。五十一歳の夫は精密機器メーカーの役員を務めている。

南麻布の家は、百五十坪余りの敷地があり、こんな一等地としては贅沢すぎる広さといえた。夫が両親から引き継いだものだが、その両親、華江にとっての舅姑はすでに亡くなって、現在には夫婦二人暮らしだった。子供も二人いるのだが、長女は商社マンと結婚して、鎌倉に住んでいる。長男はこの春大学を卒業して鉄鋼会社に就職し、勤務地の大阪へ移っていた。従って、華江にとってはまず文句のない状態で、女盛りの気儘な生活が約束されていた——。

最初の電話は、事件の翌日、四月十五日の午前十一時頃掛ってきた。庭に面したリビングルームで受話器を取った華江の耳に、

「あの、宮内華江さんでしょうか」

かん高く響く聞き慣れない女の声がとびこんできた。

「はい、さようでございます」

「今朝の新聞に出てらした奥さんですね？」

「ええ、そうですけど」

「私、あれを見て、ぜひあなたとお話ししたいと思ったもんですから」

「ああ……」

聞き慣れない声のはずで、相手は華江の知らない人だった。

「実はね、私のさとの父も、今年七十五になるの。わりと大きな屋敷だもんですから、今まで何遍も泥棒に入られたことがありますてね、それで昨日の事件が他人事とは思われませんのよ。あ

なた、ほんとよくおやりになったわあ」

「あら……別にただ、夢中だったもんですから」

「いえいえ、誰にでもできるってことじゃありませんよ。救急車を呼ぶ前に、お爺ちゃんのネクタイ緩めて、頭を高くしてあげたんですって？　それで救^{すけ}かったのよ。ほんとにあなた、あの人の命の恩人だわ」

「幸い、傷も浅かったみたいで……」

「それにしても、お年寄りはおちよつとしたことが命取りになりますからねえ。おまけに、犯人の人相なんか、すっかり憶えていて、警察に知らせたんでしよう？　偉いわあ、頭が良いのね、きつと」

「いえ、そんな……」

「一日も早く犯人が捕まるといいわね。ほんとに近頃の若い者といったら、ギャングそのけなんですから。弱いお年寄りに乱暴するような奴は、なにがなんでもふん捕まえて、うんと懲らしめてやらなくちゃ。あなた、これからも頑張ってくださいね……」

相手はそんなことを二、三回繰り返した。頑張れというのは、目撃者として今後も捜査に協力するようという意味だろうと、受話器を置いてから華江は納得した。

一方的な長話がようやく終って、ホッとしたのも束の間、再びベルが鳴り出した。

なんとそれも、今しがたと同様の見知らぬ相手からだった。今度のほうが若い女性らしく、昨日の華江の行動を評価しながらも、自分だったらこうするとか、ああしたほうがもっと適切ではなかったかななどと、勝手な意見を並べて切ってしまった。

なるほど、これが事件の当事者に舞いこんでくる電話なのかと、華江は改めて驚いたり、感心したりさせられた。つい先頃は、三重県のほうで、隣人に預けた幼児が溜池に落ちて水死した事

故をめぐって訴訟が起これ、原告と被告との両方に全国から嫌がらせの電話や投書が殺到して、当事者たちはほとんどノイローゼになったようだ。結局訴訟は取り下げになり、それがまた話題をまいたばかりだった。世間には、他人の問題に異常なほど興味を抱き、干渉したがる閑人^{ひまじん}が、想像以上に大勢いるものらしい。

とはいえ、華江に掛ってくる電話は、概ね^{おおむ}賞賛や激励なので、聞くほうもまるで迷惑ばかりというのでもない。華江は珍しい経験をするような気持で、半分は愉しみながら耳を貸すことにした。実際、どう考えたって、嫌がらせや非難を受ける筋合いはないのだから。

ところが、そうとばかりもい切れないことを、間もなく悟らされた。

その日の夕方までに、知らぬ相手からの電話はあと三回掛ってきた。一回は若い男の声で、やはり華江を賞めそやしたあと、「ぜひぼくと会って、いっしょにお茶を喫^のんでください」などといった。

つぎは、だんまり電話だった。華江が出ても相手はひと言も発せず、数秒たってから、カチリと受話器が置かれた。

午後四時すぎに掛けてきたのは、意地悪そうな中年女の声。

「宮内さん？ あなた、店に入って被害者を見つける前に、泥棒と叫んで賊を追っかけたんですってね。でもどうして相手が泥棒とわかったわけ？」

のっけから詰問調だった。

「だってそれは、とび出してきた様子がふつうじゃなかったし、私の目の前に指輪を落としていったんですから」

思わず華江も負けずにいい返した。

「だけど、いったんは店に入ってみて、お爺さんが倒れてたら、まず介抱するのがふつうじゃあ